

今川 明
IMAGAWA Akira
本誌編集委員



ささやかな癒し

もうかれこれ数年に渡って池波正太郎にはまっている。

メットを被って現場監督をしていた頃は、移動は基本的に車であったということもあって、そんな時間も無かったのだが、東京勤務となり一挙に80分という通勤時間が突如我が身に降りかかって来た。朝の通勤は恐るべき混み具合で、本を開く余裕などあったものではないが、帰りとなるとまた状況は変わる。酒臭い息を吐いてフラフラとつり革に掴まっている背広姿を見るのにも、いい加減うんざりしていた私は、有効な時間の使い方を考えざるを得なかった。“やっぱり英会話か?!”

でも意外に音が漏れてしまって、“あああの人、英会話勉強してるんだあ”とか、周りのうら若き乙女たちに思われやしないかと変に照れくさく感じて（単に自意識過剰なだけなんだが・・・）そんなこんなで断念した。

そこでたどり着いたのが、やっぱり本（文庫本に限る）である。いろんな本を読んでいた中で、親父が残した蔵書の中にあったのが池波正太郎の一冊の文庫本だった。

特にはまっていたわけではないのであろう、たった一冊。たまたま買ったのか、今となっては確認しようも無いが、親父の嗜好からは少し外れた感じで、本棚に収まっていた。変な違和感の中で、手に取ったその一冊の本に私はみるみる引きずり込まれて行った、これが池波正太郎との出会いである。

片道80分もあれば、かなり読める。酔っ払って、何かの不満をぶつぶつ口に出している哀れな企業戦士達に目が行くこともなく、完全に入り込ん

で、今まで苦痛だった通勤時間が短く感じられるようになったのは、池波ワールドに魅了された者にしか分からない感覚だろうと思う。

いまさら本の紹介をするなんて無粋すぎる。というのは、文章だけではなく、今では写真でしか垣間見ることが出来ない池波正太郎の生き方、食にまつわる部分にも大いに興味を惹かれてしまったからだ。東京浅草で生まれ育ち、小学校出てすぐに兜町の株屋の世界に飛び込み、良くも悪くもいろんなことをこの時期に覚え、戦後、役所勤めしながら創作活動、直木賞受賞、超人気小説家へ。その人生の中で池波正太郎が足繁く通った店がたくさんこの東京にはある。銀座界限にも多い。今まで銀座は夜の街のイメージだけだったが、大きく変わった。池波正太郎が通ったすし屋に一人で行った。こはだが好きになった。自分でも感化されやすい奴だと思いつくづく思う。急に親近感を感じるようになった街である。

上野の山の上ホテルにも行った。一度行ってみたかった。どんな雰囲気なのか、どんな空気を感じながらペンを走らせていたのかを知りたくて、うきうきしながら坂を上った。もう何年前のことである。近所での仕事がたまたま早く片付き、ふと思立って行ったのだが、結局中には入らず、外から眺めるだけで終わった。“まだまだ早いよ”と言われていたような気がして、気後れした記憶がある。神田藪そば近くの「竹むら」という甘味処にも行ってみた。“ああこんな雰囲気では揚げまんじゅうをほおばっていたのか・・・”とひとりで勝手に想像し感慨に耽っていた。ささやかな癒しの時間である。

バタバタと日々を過ごす中、間隙を突いて、これからは池波正太郎の足跡をたどっていけたらと思っている。次はJSTT委員会の帰りに深川不動の金つばでも買って帰ろうかな。（子供の頃からの好物だったらしいから。）

